

十四章 ふたたび日本

豆腐がうまい。

こんなにうまかったか、と思うくらいうまい。

イタリアでは6カ月保存可能、という「豆腐のようなもの」を豆腐として食べていたから、ほんものの豆腐の味には感激した。日本再発見である。ずっと食べられなかった蓮根（れんこん）と牛蒡（ごぼう）も、歯ざわりといい風味といい、うまい。イタリアにないラーメン店のラーメンも実にうまい。

一方、わたしの舌は、日本のレトルト食品やコンビニ弁当を受けつけなくなっていた。味のない素材を調味料でごまかした既成の惣菜もダメである。そういえば欧米人には、日本の典型的うま味調味料であるグルタミン酸ソーダ（通称 MSG）の味が嫌いだというひとが多い。以前日本で近所に住んでいたカナダ人は口がしびれる感じがするとまで言っていた。わたしは4年半のイタリア暮らしのあいだに、考え方だけではなく味覚まで欧米化してしまったのである。

イタリア料理が食べたくてイタリアンレストランに行くと、香辛料を控えた肉料理や、サラダドレッシングにも砂糖を入れた「日本風のイタリア料理」が出てくる。欧米の料理と日本料理との大きな違いのひとつは、欧米では基本的に料理に砂糖を入れないことなのだ。肉料理やサラダに砂糖の味がしては、まるでイタリア料理らしくない。行くたびにまずい、違う、と首を振ってはため息をつく。息子には「母さん、日本のイタリア料理がイタリアのイタリア料理と違うのは、ミラノの日本料理店の日本料理がおかしかったのと同じだよ。諦めなきゃ」と諭（さと）される。

ましてや当時の日本の田舎では、うまいチーズとうまいサラミ、それに小麦粉と塩と酵母だけでつくったうまい食事パンには、まず出会えなかった。そのせいか、日本のレストランではパンにバターがついてくることが多い。が、欧米では朝食でない限り、パンにバターがついて出てくるのをわたしは見た記憶がない。

食事パンの代わりに日本で存在感が強いのは菓子パンという、ヨーロッパにはあまり存在しない分野だ。

ヨーロッパの食事パンと日本の白米のうまさには共通するものがある。他の食べ物と共存できる控えめなところがありながら、それだけで食べても充分味が深い。風土と歴史でつくりあげたうまさである。日本人は米のうまさにすごくこだわり、うまい米は塩だけかけて食べてもうまい。コンビニでおにぎりを売っているのを見ると、ああ日本だな、と思う。

同じように、たぶんヨーロッパでは小麦そのものにも、日本のコシヒカリやひとめぼれみたいな品種がいろいろあって、パンのために各地で厳選しているのではないか。村によってパンの味が違うと言うからには、酵母にもいろいろあるに違いない。あの食事パンのうまさときたら、「そうか、パンというものはこんなにパンだけでうまかったのか」と堅いのを噛みしめかみしめ、感心するほどである。

そういえば、欧米人は白米を味が無いと言って苦手とする傾向がある。アメリカ人はよくしょうゆをかけて食べていたし、韓国人の経営するイタリアの日本料理店では、定食のご飯が寿司飯だったこともある。

そう考えると、食文化の中でも、肉や野菜のように最初から味の主張がはっきりしているものより、白米や食事パンといった、味が一見控えめで、おかずと一緒に食べる「主食」に関する部分のほうが根が深く、かつよそ者には受け入れがたいものなのかもしれない。

久しぶりの日本の書類は書きにくい。学校の書類などは、わたしも保護者であるのに夫の名を書かなくてはいけないことがあった。気に食わない。保護者名が世帯主である必要はないと思うが。イタリアでは保護者ならどちらでもよかった。わたしは自分が自分の責任において書類に記入するのなら、自分の名を書きたい。銀行口座もイタリアやアメリカなら夫婦連名だったが、日本だと当時、わたしが手続きに行っても夫の名を書かねばならなかった。

名前にこだわるのは、名前がひとを表すからだ。わたしはマドカであって夫

ではない。日本に帰ると、家族の1員として姓で呼ばれ、子どもの母として何とかちゃんのお母さんと呼ばれるが、マドカと呼ばれることは少ない。妻だとか母だとか嫁だとかの役割としてのわたしは、わたしの中で一番大切なところではなく、一番大切なのはマドカの部分である。それが否応なしに無視されているような気がする。

日本の書類にはサインではなくハンコも必要だ。役所に手続きに行っても自分のハンコがなかったら、家まで取りに帰らなければならない。それに公的書類はみな西暦でなく元号で書かなくてははいけない。計算がめんどくさく、不便だ。

わたしはすっかり日本人じゃなくなってしまった。

イタリア語でしゃべる相手がいらない。英語でしゃべる相手もない。イタリア語につきまとう派手な身振りや大きな笑顔、英語特有のユーモアもない。そして、予想どおりとはいえ、外国に住んだことのないわたしの周囲の日本人に、帰国したてのわたしの逆文化ショックとでもいうものの辛さを理解してくれというのは、とうてい無理な話であった。周囲にはわたしが外国に住み始めたときの大変さは容易に想像がつくが、日本に帰って来たら万事スムーズで楽だろうとしか考えられない。

わたしは孤独だ。

ひどく疲れやすい。だるい。2度目の手術からふた月もたたないうちに国を越えた引っ越し、という動き過ぎがたたったのだろうか。化学療法の後遺症ならば1年たてば消えるというのだが。からだが重くて、炊事と洗濯をしたらあとはろくに動けない。毎日昼寝が必要だ。どこかへ1カ所でも出かけると、そのあとは必ず休憩がいる。

わたしは何をしているんだろう？

日々無益に、無為に、過ぎていく。

空虚だ。

少し背景は違うが、故郷の詩人中原中也の「ああお前は何をしてきたのだと、吹き来る風が私に云う」の感じだ。

買い物に出かけるのもひどく億劫（おっくう）で、あるとき、この次はいつまたスーパーに来るのだろうか？ と思うとつい、カートに入りきれないほど買い物をしてしまった。山ほどの食料品を前に、「わたしは精神に異常をきたしているのではないか」と本気で心配した。

たまりかねたわたしは心療内科医に行った。抗鬱（うつ）剤をくれと頼んだのである。医者はよく話を聴いてくれ、引っ越しは鬱をひきおこすストレスの原因の上位 10 位以内にありはするが、ぐっすり眠れてよく食べられているなら、鬱病という病気ではない、と言った。

それ以上、打つ手がない。

しばらくして、イタリアの大家から家の修理費の請求書が来た。

120 万円。

浴室には浴槽の蓋（ふた）と換気扇がなかったから、壁がカビで黒ずんだのはわたしたちの責任と言おう。白い漆喰（しっくい）壁が全体に薄汚れたから塗りなおすというのもわかる。息子がスプレーでいたずら書きした外壁の清掃も当然だろう。引っ越しの寸前に使えなくなって残した電気洗濯機の処分代もハイと言おう。洗面所の棚を取り替えたいというのもよしとしよう。責任逃れをしようというつもりはない。

が、以前からの住人が残していったもろもろの家具の処分、10 年以上かけて傷んだはずの廊下のじゅうたん、住み始めたときからひどかった庭の芝生のやりかえ、そんなものまで全部修理費につけられていた。それを、最初の約束どおり、夫の退職金から差し引く形で払えと言う。

わたしは激怒した。

3 日経っても怒りで腹の中がチリチリと沸騰を続けている。

わたしの計算では、なんぼなんでも 3 分の 1 の 40 万。それでも、どうみても少ない金額ではない。1 週間ほどかけ、これは払うが、あれはわたしたちに責

任はない、と1つひとつ例をあげ、一生懸命イタリア語で4ページの手紙を大家に書いた。

返事はない。代わりに修繕が必要な場所の写真を送ってきた。

話にならない。

5月にもう一度わたしだけイタリアに行くことになった。というのも、電気や水道料金など、日本なら引っ越し際には日割りで現金精算できるものが、イタリアではできずに最後まで自動引き落とし。そのために引っ越し後もそのまま置いていた銀行口座を、行って閉めるためだった。

加えて、大家との交渉。幸い、わたしの3代前に国際クラブの会長をやったイタリア人のサビーナは、外国人相手の不動産紹介とトラブル処理をしていたので、手紙を書いて交渉を頼んでおいた。直接会って話をしよう。

またイタリアに来ることができた嬉しさと、からだの不調の不安の両方を抱え、ミラノ郊外のマルペンサ空港に着いてレンタカーを運転し始めると、高速道路の両側のセアカシアの樹が白く花盛りで、延々と甘いにおいが風に乗ってわたしを包みこんだ。まるで「マドカ、よくイタリアに帰ってきたね」と暖かく歓迎してくれるように。わたしはひとり笑みを浮かべて喜びをかみしめた。

にセアカシアが咲くのはひと月早い。えらく暑い。5月というのにノースリーブでちょうどいい。ヨーロッパ全部が春先からずっとひと月前倒しで暑くなり、夏はフランスで1万人が死ぬという猛暑にそのまま突入したとは、あとになって知った。泊まれと言ってくれたアルゼンチン人のサラの家の3階の屋根裏部屋に荷物を置き、さっそくサビーナに会って話をすると、ダメよこれは、と彼女は首を振る。

「どうしてよ？ わたし自分に責任のあるものは払うわ。でも、じゅうたんなんてわたしたちの前の前の家族から、10年以上かけて傷んできたものじゃない？ 芝生だって4年半前に来たときひどいのにびっくりしたの覚える。こんなの借家人の責任じゃないわ。車庫の棚の折りたたみ机だとかガラクタなんか、みんな最初からあったのよ。そんなものだと思って住んでた。どうして前

の住人のぶんまで払わなきゃいけないの！」

「車庫のガラクタはね、あなたたちが前の借家人から個人的に引き継いだもので大家のものではないのよ。あなたたちに処分する責任がある。それに庭とか、来たときどうだったか写真なんてないわよね」

「あるわけないわ。こんなお話にならないようなイチャモンをつけられるなんて思ってないもの」

「じゃ証明しようがないわ。向こうは芝生もじゅうたんも最初はきれいだったって言うてる」

「そんな馬鹿な！ 会社の人事のひとが立ち会って全部一緒に見たのよ。中年の男性がふたり来た。わたしコーヒー出したの覚えてる。イタリアに着いてすぐだったけど、わたし全部イタリア語でなんとか話したのよ」

「彼らはもうみんな辞めてる。今いるのは去年来たばかりの何にも知らない女の子。規定どおりにやるしかできない。大家の代理は誰？」

「ロベルト」

「ますます駄目だわ。彼は外国人のあいだで悪名高いの。徹底的にイタリア人大家の肩もつのよ」

「大家の奥さんはドイツ人よね。わたしたちが住んでるあいだずっと、ボイラーだとか戸の蝶番（ちょうつがい）だとかの修理費も全部出してくれたわ。庭の木の刈り込み代も。えらく話のわかるひとだと思った。わたしラッキーだって。それがどうして今になってこんな理不尽なこと言うの？」

「あのね、彼女はあの時分大家が責任のないものまで、あなたたちが言うから出したって言うてるの。だから今度は払ってもらって」

「金額の桁が違い過ぎるわよ。大家が出したのはせいぜい数万よ。わたしたちの120万はおかしいとあなた思わない？」

「向こうは1つひとつ金額をあげて合計してる。マドカ、わたしベストは尽くすけど、勝ち目はないわ」

「住み始めたときの保証金があるはずよね。請求書の中に話が出てこなかった。あれで30万は違うはずよ」

「そうね。確かめてみる」

結局、100万円について。

普通、借家人が払わない、そんな金はない、と言えは交渉の余地はもっとあるのだが、なにせ契約が会社経由で、退職金の中から差し引かれるのではどうしようもない。会社が従業員側につかず、大家側についた格好である。

甘かった。

イタリア暮らしのとどめに、一番の損がきた。

これもイタリアらしいということか。

ところで、落ちこんでいるのはわたしだけではなかった。夫は会社で、日本語と日本人はなんとややこしいのかと胃を痛くしていた。イタリア人と違って日本人がきちょうめんで信頼できるのはいいのだが、そのぶんこちらも重箱の隅までキッチリ仕上げることが当然とされる。アメリカでもヨーロッパでも、他人の仕事の批判は仕事の批判でおしまいが、日本では人格の非難まで含みかねない。母国語だというのに、イタリアにいたときの3倍くらい気を使ってものを言わねばならない。パソコンも漢字変換がめんどうくさい。おまけに、ちょうど今までの会社が大きな別会社に吸収されたところで、社風も今までと違って何やら落ち着きが悪い。

イタリアにいるあいだ、呆（あき）れはてることや怒り心頭に発することがあると、わたしと亭主はふたりで歌をうたったものだ。いや、歌というほどのものではないが、「ここはイタリア～！」と節をつけて大声をはりあげ、怒りや憂さを発散させ、自分たち自身に諦めるよう言いきかせるのである。今ではふたりして「ここは日い本～！」である。

そして長男は中3の冬休みというきわめてビミョーな時期に日本の田舎の中学に入り、年明けの実力テストをほとんど白紙で出した。無理はない。日本語のテストなんてほとんど受けてなかった。担任の先生に、どの高校を受けたらいいでしょうかとわたしが尋ねると、どこでも好きなところをどうぞと言われた。

生徒が高校入試寸前の帰国、実力テストは白紙、ときには、日本での学力がまったくわからない。ミラノのインターナショナルスクールの通知表はコピーして簡単な日本語訳をつけて提出していたが、そのレベルがわからなければ、日本でどの程度に当たるのかも推定できない。先生もお手上げだったのだろう。しかし親は途方に暮れる。

息子に公立高校は難しかったので、雰囲気良く、ここなら行かせてもいい、と思う私立を受けさせはしたが、通るかどうか、誰にも読めない。

通るかな、と思う。落ちるかな、とも思う。が、わたしがどう気をもんでも、結果には何の影響も及ぼさない。無駄である。そう気づいてからは、懸念を棚上げすることにした。考えないで、運命にお任せするよう腹をくくった。が、合格発表までのわずか1週間をおそろしく長く感じたのは、棚上げが完全にはできなかった、ということだろう。

通ったからよかった。夫は中学浪人まで考えていたのである。

その後しばらく息子はおさだまりの反抗期がきつく、嘘のように落ち着くまでの2年ほど、わたしは何度も息子を正座させてぶん殴った。正座させて一息ついてから殴るのは、急にわたしが手を出すと、息子も反射的にわたしに手を出してしまうのを防ぐためである。とはいえ、今では親から子への暴力、すなわち虐待に相当するのかもしれない。

しかし息子はわたしの財布から万札を盗むのを続けていたうえ、わたしのつくった弁当の中身を捨て、代わりにコンビニ弁当を買って食べていた。二重に許せるものではない。夫は盗難といっても家の中だけだからと安心していたが、わたしは将来息子が横領でもしはしないかと気が気ではなかった。「クソばあ、死ね」と怒鳴られたときには、わたしは怒り狂って息子をひと晩家から追い出した。

あとからわかったのだが、息子もイタリアでつくった友人たちから強制的に引き離され、日本の学校では「イタリアン」と呼ばれてなじめず、友人関係で苦勞していたのだった。とくに帰国したてのころ、中3の冬休み明けという時期では、すでにクラスの間人間関係が完全にできあがっているうえに残りの期間

はごくわずかだから、新しく友情が育つ余地は少ない。おまけにほとんどの生徒は入試を前に神経質になっている。そんなときにひとり異分子が紛れこみ、まるで居心地が良くなかったらしい。もちろん日本語での勉強も大変で、その原因をつくった親を恨んでいる部分があったことだった。

帰国子女なんてカッコいいと思われがちだが、そう簡単なものではない。

そして気がついてみると、中1の長女は学校を休みだしていた。3年越しの慢性の頭痛に親と同じ逆文化ショックが加わり、不器用にも日本の習慣に「なんでそんなバカなことするの?」と言えば、まわりの子は白い目で見るところは、いいところはたくさんあるがずいぶん閉鎖的でもあった。ひどい頭痛とだるさのため、娘は半年後には朝起きて学校に行く日が、月に1日もなくなった。

悪夢のようだった。

子どもが毎日学校に行くのはあたりまえではないか。それが行けない。

何カ月も。

そしてたぶんこれからも。

しかもこの子は4人の子の中で一番まじめながんばり屋なのだ。高校受験も気になるが、中学校で習って、一生役に立つことは山ほどある。漢字はもとより、理科の電気や電圧、天気図の読み方、日本や世界の地理、歴史。この子はそれを全部身につけず、大人になっていくのか?

毎日病気の子と暮らす親は辛い。

そしてわたしがしてやれることが、ほとんどない!

これまでわたしは「わが子が病気で苦しんでいると親は代わってやりたいと思う」という台詞(せりふ)を美談として聞いていた。利己的なわたしは子の代わりに苦しみたいと思ったことがなかったのだ。しかし今回だけは、自分が具合が悪いほうが楽だと思った。ま、がんは別としてもだが。

コンピュータのトランプ遊びをしながら、鼻をすすりすすり、わたしは娘に聞こえないようにぼろぼろ泣いた。

地球

山は元旦がいつかを知らない
空は降誕祭（クリスマス）がいつかを知らない
わたしの息子が高校に入れるかどうか
娘の病がいつ治るか
どの木も知らない

わたしが生まれる前から
そこにあるものたち
わたしが死んだ後も
そこにあるものたち

風よ
雲よ
わたしが滅びたらわたしを迎えてくれ
わたしをおまえたちの一部にしてくれ

娘を連れて医者に行く。

娘を起立性調節障害だと診断した医者が以前処方した漢方薬は3カ月のませても変化がなく、おまけに娘は不味（まず）過ぎると不平を言い、朝昼晩3回のませるのにも無理があったので諦めた。

カウンセリングなるものにも行ってみる。

娘自身はまるでのってこなかったが、わたしの役にはたった。これからの見通しや親の心構え、親が子に言っていいことと絶対口にしてはいけないこと、

そして「あれはざる休みだ」とわめく兄弟への対応などをわきまえておきたかったからである。

当時、ものすごく運がよかったのは娘の最初の担任の先生だった。先生自身那不登校と長期の自律神経の不調を別々に経験していて、娘は「この先生ならわたしのことを理解している」という絶対の信頼感をもった。稀有（けう）なことである。娘はとうてい朝起きられないときでも、先生に会って話をするためだけに放課後の学校へ行ったことが何度かあった。

そして一番効果があったのは、心療内科も看板にあげている近所のかかりつけの医者だった。この医者は娘に何が得意か、外国語は何ができるのかと尋ね、娘の「英語は得意、イタリア語も多少できる、スペイン語もほんの少し」という答えを聞いて目をぐるりと回し、「君の最大の強みはその語学力だ。4カ国語ができるなんて日本の子にはまずいないよ。今の中学校に自分をあてはめようとするより、その語学を生かす方向で何か考えたらどう？」と言い、それを聞いたわたしは、転校させることを考えついた。やっと、突破口になるかもしれないものが見えてきたのである。

イタリアにいたころと少しでも近い環境に、娘を置いてやろう。

それならわたしにもできる！

幸い隣のつくば市には、教師陣に外国人がいて国際クラスがあるらしいという魅力的な私立の中学校があった。が、欠員補充の試験に落ちた。

私立がダメなら公立だ！

わたしはつくば市の教育委員会に電話をかけ、事情を話して「この市の中で一番外国人と帰国子女、そして転出入の多い中学校を教えてください」と頼んだ。動きのないところが閉鎖的になると逆に、転校生の多いところは雰囲気開放的になる。

ありがたいことに職員は同情的だった。条件に合う学校を順に3つほど教えてくれたあと、「外からでもいいから見に行ってみて、娘さんが『行きたい』というところを選ばれたほうがいいですよ。気持ちで違いますから」と助言までしてくれたので、わたしは即刻その学校に電話をかけ、見せてくれるという約束を

とりつけ、娘をたたき起こして一緒に見学に行った。娘は乗り気になった。

よし、転校だ。

これで救われるかもしれない！

とはいっても、娘は新しい学校を気に入りはしたが毎日行けるわけではなく、最初の1週間は、娘が行けばわたしは夫の勤務先まで知らせて喜び、行かなければ胃が痛くなるという繰り返しだった。

結局、娘の中学校3年間の出席率はちょうど半分だった。が、少しずつ、少しずつ体調が上向いていくのは、娘が何も言わなくても、食べる量でわかった。転校したてのころは学校から帰るともうくたびれはて、晩ご飯も風呂も抜いて夕方から翌朝まで眠る日が週に2日はあった。それが数カ月単位で少しずつ減っていった。

朝ごはんもパンは駄目、ご飯もみそ汁も駄目、おにぎりならほんのひと口、というのから、半年たつとおにぎりひとつ丸ごと、みそ汁もひと口食べられるようになり、そしてパンも大好きな卵サンドなら半分、そしてひとつ丸ごと、と増えていった。わたしはどんなに嬉しかったことか。

元来短気なわたしは、この期間にずいぶん、「辛抱」ということを勉強したと思う。子を育てるあいだに親も成長するというのはほんとうである。

こうやって上のふたりの子に心痛が続くあいだ、小5と小3で帰ってきた下のふたりの子が順調で、どれだけ家の中が救われただろう。笑えることがあるのだ。小学校のあいだは帰国子女でも大丈夫である。毎日の生活がよければそれでいい。子どもを4人産んでおいてつくづくよかったね、と夫と話す日々だった。

とくに3番目の子は、イタリアにいるあいだ英語での生活に不適應で、友だちがひとりもない、と学校から親に呼び出しがくるほどだったのが、日本に帰ると何の問題もなく、友だちと遊び、友だちの家にも遊びに行く。この子には帰国ほどいいものはなかった。

日本に帰って2年近くして、がんの再発防止のホルモン薬の種類が変わり、

ひと月ほどしてみると、だるさが軽くなっていた。だるいのは副作用だったのか！そしてこの新しい薬の説明にも、脱力感の副作用が伴うことがある、とあった。

副作用はひとによって出かたが違うし、乳腺外科の医者は腫瘍があるかないかしか見ず、「外科的には問題ありません」というばかりで、クオリティ・オブ・ライフ（生活の質）なんて頭がない。どうしてだるいのか、という疑問に彼は答えられなかった。彼の守備範囲ではなかったということらしい。

イタリアにいた腫瘍科の医者なら答えられたらどうか。

イタリアの病院のいいかげんさには頭にきていたが、夫はそれでも、あの国立がんセンターにはそこだけで 20 人以上の腫瘍科の医者がいたが、日本では全国でもそれくらいの数に過ぎないから、やはりわたしはイタリアで手術してよかったと言っていたのだ。日本のやり方でわたしに理解できないのは外科医が化学療法を担当するというので、いわば切ったり貼ったりの職人的な外科に比べ、体調も含めて病気を見るのには内科医のほうが向いているように思う。

仕事柄抗がん剤に詳しい夫は、日本では外科が中心で化学療法は遅れ気味だと言っていた。理由は副作用への対処が難しいから。いったいに医者は副作用を重視しない、とも言う。患者にとってはかなりの問題なのだが。困ったことだ。

だるさと同時に、「ほてり、のぼせ、というのはこれか」という更年期によくある症状が日本に帰ってから始まっていた。急にからだか熱くなり、汗が出るというほどひどくはないが、冬でもふとんをしばらくはねのける。数分で元に戻る。わたしはホルモン系の抗がん剤のため 42 歳で閉経しているから、更年期障害が出ていても不思議ではなかった。

乳がんのあとで出やすい子宮がんの早期発見のため、乳腺外科と同じ日にかかる婦人科の医者にも、だるいのも更年期障害なのか、どのくらい続くのか、と問うても、医者は「ひとによって違いますから、いつまでと言われてもねえ。70 歳になって更年期、というひとはいませんから」と言うくらいで、煮え切らない。出口のない思いが続いた。

がんの再発は生命（いのち）にかかわるから、副作用が辛（つら）くてもこの薬をやめるわけにはいかない。術後 5 年間のまねばならないから、さらに 3 年近くはこのだるさを覚悟するより、ない。副作用が出ないひとはまるでだるくないのだから、不公平だ、とも思う。

辛抱である。

まったくだるい日は、「もう長くないな」と思うくらいだるい。経験したことのないヤツにこれがわかるか、と思う。

朝から目が窪（くぼ）み、からだが重い。何にもやる気が出ない。ご飯のしなくと洗濯だけはするが、あとは横になって眠ったり、本を読むか数独（すうどく）という数字パズルをするかで、それが 3 週間も続くと、「どこか悪いんじゃないか」「ひょっとして再発か」などと、なかば本気で心配する。

あとで気がつけば、このときは直前に 2 日間スキーに出かけて思い切り滑りまくっていた。医者には「泊りがけでスキーに行けて結構なことです。だいたいがんが再発してもだるさなんて症状は出ないんです」と冷やかされ、叱られた。しかし、2 日のスキーで 3 週間もひどいだるさがとれないのでは、さすがにイヤになろうというものだ。

わきの下のリンパ腺を取ったことによるむくみも少し出始めた。よくあるように腕ではない。わきの下から横腹にかけてで、ブラのベルトの上がぽっちゃりとふくらみ、醜（みにく）い。シリコンの入った右の乳房の、縫った線の右側も、固めのゼリーでも入れたように膨（ふくら）んでいる。夏に庭の草取りを本気でしたあとは、右腕全部にむくみがきた。横になって休む際、医者に言われたとおり、腕を上にあげて指先から肩へとマッサージをする。リンパ液が降りていきますように。

二の腕の内側の皮膚の、触った瞬間にぴりぴりする痛みは、気がつくともなくなっていた。が、わきの下のくぼみの無感覚はそのままである。ムダ毛を始末するときにまちがって毛抜きで皮膚をはさむと、左側のわきなら痛くて涙が出るが、右側はまるで痛くない。ならばこれはいいことじゃないか、そう思うことにした。

1年1回の定期健診に行って検査をしたあと、結果を聞きに行く日の前はいつもイヤな感じだった。がんを経験したひとはみんな同じではないかと思う。「たぶん大丈夫だとは思うけれど、ひょっとして再発していないよね、まさか明日また告知されないよね」という不安な気分である。そして再発していないと聞けばホッとする。その繰り返しだった。

だるさが続く一方、わたしは次から次へと「会長」をしていた。国際クラブの会長に味をしめたわけである。半日動いて3日寝こむ、1日動いて1週間寝こむのを覚悟するなら、なんとか動けた。何か活動していれば、心の空虚さがない。

最初はなんと、売春ビラをはがす団体の会長だった。家がたまたまラブホテル街のはずれにあり、イタリアから帰ってみると、けばけばしく電話番号を記したデリヘルビラが子どもの通学路に何十枚も貼られていた。デリヘルとは和製英語のデリバリーヘルスの略語だが、何がヘルスだか、実態は「売春婦の宅配」である。元校長のカレンではないが、「通学路だけは勘弁してよ」だ。

たまりかねて近所のひととビラをはがし始めたが、2人や3人ではラチがあかない。広範囲に仲間を募ったら、「ヤクザが出てこない？」と恐がられた。市役所に相談すると、「県登録のボランティア団体を設立しませんか？ そうしたら『身分証』が出せます。県の後ろ盾があるという証拠です」と言われた。なんだか大げさな話になったなと思ったが、しょうがない。団体を設立して会長になった。

メンバーを増やそうと、娘の高校でも呼びかけた。学級懇談会の最後に話を出し、「一番許せないのは、デリヘルビラに『日本人の女の子募集中』とあることです。携帯があれば、小学生でも親の知らないあいだに連絡して売春できます。まさかこの学校でやっている子がいるとは思いませんが」と言ったとたん、赤川次郎流にいうならば、教室の温度が3度くらい急に下がった。雰囲気は凍りついたのである。教師と親の誰もが、やりかねない女の子の顔をひとりふたり想像したに違いない。がぜん、みなさん真剣な顔になった。

その数日後、娘が「友だちのママが母さんのファンなんだって。母さんまた学級懇談会で何か言ったんでしょ」とわたしに言う。

「？ そのママはあの日学級懇談会に出てなかったし、わたしと話もしてないわよ？ ……わかった。そんなカワイイもんじゃないわ。わたしね、体育館でのPTA総会で、あの蛍光ピンクのビラを高く両手に振りかざして、『みなさん一緒にビラをはぎましょう！』って思いっきり怒鳴ったのよ。で、そのあとメンバー募集のチラシを配った」

「……そら、カワイくないわ」と娘は首をすくめた。

活動家の母を持つ娘も楽ではない。

売春ビラをはがしていると、イタリアでの会話を思い出した。英語でもイタリア語でも、腹をたてて相手を罵（ののし）するときのことばには性的なものが多い。英語だとまずファックユー。ファックというのはセックスするという意味だが、どうしてその後に「おまえ」を意味するユーがつくのがわたしにはわからない。一度カナダ人のアンナをつかまえて、俺がおまえをファックする、つまりホモが男をレイプするという意味か、と尋ねてみると、そうではないと言う。じゃあ何かと押して尋ねてみると、彼女はそんなことは考えてみたこともないという顔で眼をパチパチさせながら、一生懸命考えて答えた。ファックというのはセックスの中でも非常に良くないセックスの意味だから、おまえがひどいセックスをする、という意味になる、と。すると傍にいたイギリス人のカレンが付け加えた。

「マドカ、あんたの子どもが腹たてた時に絶対このことばを言わせちゃダメよ。意味がわからないことばでも子どもは他人のまねして言うことがあるけど、言ったら殴られてあたりまえ、っていうくらいのひどいことばだから。中指立てるのも同じ意味だから、絶対ダメよ」

わかったようなわからないような説明だったが、ほかの罵詈雑言（ばりぞうごん）はもっとわかりやすい。英語でバスタード、イタリア語でバスタルドは私生児の意味である。イタリア語ではもっと念入りに「フィリオ・ディ・バス

タルド（売春婦の私生児）」。

もうひとつ大人の男に対する悪口にはコルヌートというイタリア語がある。角（つの）を生やした、という意味で、鬼の意味か、とイタリア人に尋ねると、違う、亭主が女房に浮気されて怒って角が出た、ってことで、おまえの女房は浮気してる、おまえは寝取られ男だ、っていう意味だよ、と説明する。言われた男はまちがいなく腹を立てるだろう。

寝取られ男？

そういえば昔高校生か大学生のころゾラか誰かのフランス小説を読んだとき、コキユということばが寝取られ男という意味だった。

おまえがひどいセックスをするとか、私生児とか寝取られ男とか、日本語の悪口としてはほとんど聞かない。

わたしがそう言うと、フィンランド人のキルシが言った。

「それは日本の文化が性に寛容だからじゃない？」

「西洋の文化では性に寛容じゃないの？」

「キリスト教があるもの」

「キリスト教は性に寛容じゃないの？」

「ないわね」

なるほど、そういうものかもしれない。禁忌があるからこそ、それに反することばが悪口になり得るのだ。悪口の背後にも文化の違いがある。

計3千枚ほどの「売春ビラ」をはがしているうち、40人の子ども会の会長が回ってきた。子ども会の年に1度の旅行では、親付きで遊園地に行く。会社員の親は日曜より土曜を好むが、接客業や職人は土曜も休めない。ウチのバッチ（茨城弁で末っ子）の同級生の保護者がふたり、どうにも仕事を休んで遊園地に行くわけにはいかないと言うから、わたしは腹をくくり、絶対にわたしの指示に従うという条件で男の子ふたりの世話を引き受けた。案の定（あんのじょう）、男の子ひとりには2発ビンタを食らわせることになったが、その子は自分が悪いことをしたとわかっていたから文句は言わない。この子たちふたりとは、

そのあと何年も顔を見れば「よう、元気してる？」と笑顔でつきあう仲である。

末っ子の中学校で卒業式で親の謝辞を読んだら、かなり型外れだが正直な内容がウケて、今まで話したこともない先生からも涙が出そうだったと感謝された。

さらに2年して、84軒の町内会の会長も引き受けた。やり手がない、というのを聞き、天皇でさえ男だの女だの言ってるんだから、町内会長くらいわたしでよけりゃやるよ、と言ったら、ほんとに話がきた。ただ、「まどかはときどき突っ走るから、役員の中に抑える人間が絶対要るぞ」という話があったらしいのをあとで耳にして、苦笑いした。

そうなのかしらん？

確かにわたしは昔から要領が悪く、方向をろくに考えもせずに突き進んでは、玉砕したり、ごうごうたる非難を浴びたりすることも多い。

それでも、わたしは20代で最初の仕事に失敗して以来、心の底にある絶望感と劣等感にさいなまれ続けていたが、イタリア暮らしを転機にして生まれ変わった、という実感がしている。他人が嫌がる会長職がわたしにはできる。それに、わたしは日英伊の3カ国語が話せる。わたしは自信を、生きる力をとり戻しつつあった。

オーボエを再開したのは帰国後1年近くたってからだった。

だるさを抱え、やっとこさ先生を探しあて、芸大出の若い先生のオーボエを聴いてわたしは愕然（がくぜん）とした。イタリアで聞きなれたオーボエの音と、まるで違ったのである。先生が言うには、同じオーボエでもドイツ系の音とフランス系の音の出し方があるらしく、この先生の音はドイツ系だった。イタリアの音はフランス系なんだろうと言う。

教え方も日本とイタリアとではずいぶん違い、わたしはどうして母国語で話す先生のことばが理解できないのだろうか、よく首をひねった。音が開（ひら）いているとか、ころんでいるとか言われるのだ。尋ねてみると、開いた音とはオーボエらしくないラッパのような音で、ころんでいるとはリズムが早く

なったときの表現である。

それでも2年、3年と同じ先生についていると、当然、先生の音がきれいに聞こえてくるようになる。大好きなバッハの教会カンタータの楽譜を銀座の店で見つけ、にんまりとしてそればかりやりたがるので、先生にはあきれられた。バッハの「ヨハネの受難曲」の一節を発表会で吹いたときには、昔から好きだったメロディだけに、当時理想としていた「下手なりにきれい」が実現でき、全6回の発表会のなかでただ一回、自分で満足しただけでなく音楽教室長にも褒められた。

しかし次の発表会で「チェロと合わせたい」と先生にねだってアンサンブルにしてもらったところ、当日舞台の上で、オーボエが何小節か休んだあとで再開するところがわからなくなってオタオタしてしまう、というひどい出来で、かなりガックリきた。どうもわたしには曲全体の流れというものが、まるでわかっていなかったらしい。

一方、がんの再発予防薬が変わってだるさが減ると、オーボエでも少しいい音が出せるようになり、その後近所のひとが捨てていった犬を飼うはめになって毎日散歩を始めると、格段にいい音が出るようになったのには先生もわたしも驚いた。中年で楽器を始めたはいいが、ずっとできなかった腹式呼吸が、散歩という運動のおかげでできるようになったのだった。犬はずいぶん言うことをきかず頭にきたが、オーボエに関してはお犬様さまである。風が吹いて桶屋がもうかるというが、犬を飼ってオーボエがうまくなるとは思わなかった。

管楽器を吹くとからだが温まる。夏はかなり熱くなる。けっこう運動になるのだ。それは血液の流れをよくしてからだの免疫を活性化させるから、がんの再発予防にもいいと夫は言っている。そう告げるとオーボエの先生は、はあ、と、かなり妙な顔をした。初めて聞いた管楽器演奏の効用だろう。

犬を飼い始める直前に山羊を飼い始めた。空き地の雑草を食べさせるためだったが、種つけにつれて行って仔山羊を産ませ、母山羊の乳をしぼってチーズまでつくった。その楽しさとトラブル満載の顛末（てんまつ）については、『猫と山羊と犬』という別のエッセイに書いた。気が向いたら読んでいただけると

嬉しい。

町内会長になって2年目、地区の夏祭の女神輿（みこし）のかつぎ手の名簿に、知らないあいだにわたしの名前が入れられていた。ままよ、とゴム底の足袋（たび）をはき、お囃子（はやし）の笛と太鼓を背中に聴きながらセイヤ、セイヤ、と声をあげて神輿をもんでいると、すごく気分がいい。結局休憩を入れて3時間半かついでしまった。

ヤバイ。

わたしは神輿かつぎが好きだ。

次の年、また神輿をかついでいると、脳ミソの中に麻薬物質が出ているのではないか、というくらい恍惚として気分が良かった。「祭、命（いのち）」という祭バカが世の中にいるのは知っていたが、これか！ と実感した。ところが、その翌々年は女神輿のかつぎ手が少なく、女としてはやや背の高いわたしの肩には神輿の重さがずっしりとかかり、翌日から3日間、からだ中の関節が痛んだ。これには参った。

ところが祭というのはいいもので、神輿だけでなくお囃子も魅力的なことに気がついた。お囃子の列について歩いていると、「おめえやってみっか？」と小さな鼓（つづみ）を持たせてもらった。ところがどっこい、思ったよりずっとリズムが複雑で難しい。練習せずに叩（たた）けるような代物（しろもの）ではない。

本気でお囃子がやってみたい、とわたしは思い始めた。

それにはお囃子会に入れてもらって、毎週の子どもたちのための練習会に出なければならない。しかし、この閉鎖的な田舎で、よそ者のわたしが50歳にもなって、土地のひとばかりのお囃子会に入れてもらえるのだろうか？ やっていけるのだろうか？

なかなか勇気が出ず、実行するまでには丸2年かかった。

お囃子の練習会に出始めても、お囃子の楽譜は○と△だけで書いてある独特なもので、ひとりでは練習もできない。練習会で、横にいるうまいひとの手を

ずっと見ながら小鼓（こつづみ）を叩いていると首が痛くなる。お囃子会の中にも親切にしてくれるひとがいてありがたかったが、依然冷たいひともいた。

しかし続けていれば慣れてくる。慣れてくると、祭はお囃子で実に楽しい。お囃子会のひととも少しずつ仲よくなっていった。どこだって飛びこんでいけば、なんとかなるものだ。

術後5年が無事にたち、再発予防薬をのまないでよくなって、たるさがほとんどなくなった。しみじみと、すごく嬉しい。

からだの調子がいいと、現金なもので、考えることが暗くならない。気分を左右する元には体調があると、改めて思う。新聞記事などで、がんをやりました、10年になります、2度やりました、などとケロリと書いてあると、どうしてあああつけらかんと言えるのか不思議だったが、体調が良くなってみるとよくわかる。人間、喉（のど）もと過ぎると熱さを忘れられる。そしてそれは幸いなことである。

よし、これで仕事にかかれる。

翻訳学校に通って技術を磨き腰を据えて、とはいえ大家族の主婦をしつつだからポチポチだろうが、翻訳をしたい。

翻訳屋になることは20代からの夢だった。まずは翻訳学校に通おう。東京まで片道2時間半はかかるが、夫が毎日通勤しているのだからわたしにもできなくはなからう。

夫の勧めに従って医薬専門の技術翻訳を選び、週1で8カ月翻訳学校に通った。が、そのあとの試験には落ち、しばらくは開店休業が続いた。そのうち、料金は安いが定期的な案件を受けることができるようになり、専門用語にもじわじわと慣れていった。

そうなる仕事に追われ、毎日オーボエの練習をしたり、半日かけてレッスンに通ったりする時間がとれない。わたしはオーボエをやめる決心をした。日本に帰ってからはイタリアにいたときほど練習に熱が入らず、少しずつうまくなってきたとはいえ、存分に吹きこなせるレベルにはまだ達していない。が、

管楽器を吹くには体力が必要で、歳をとればとるほど難しくなるから、これから飛躍的にうまくなれるとも思えなかったのである。

ミラノはずいぶん遠くなった。

思い出すとせつなくなる。

わたしたちの人生はイタリア前とイタリア後に分かれるんじゃないかと思うほど変化したのだが。

わたしの父が山口から茨城に来て、7年同居した。母が亡くなったときに、親孝行は生きているうち、ということばが身に沁（し）みたから、わたしが父に孝行ができるのは幸いである。とはいえ、家族は7人。洗濯物も食事も、毎日大量。今晚は豚カツ、という日は10枚のカツを揚げた。その日の分が7枚、あくる日の子どもふたりの弁当とわたしと父との昼食用に2枚、将来の弁当のおかず用にさらに1枚である。

父といると、母のことも考える。

母は大学を出ずに大学教授になったひとであった。非常な勉強家で、家にいるときもたいてい机についていた。若い時分から熱心に俳句をつくり、父とふたりで、といっても母が主になって句会を始めて30年主宰し、句集を何冊か出し、俳人であると同時に俳句の評論もしていた。テレビや講演に出ることもある地方名士だったので、わたしは結婚するまでどこへ行っても、母の子だとして見られた。誇り高い気もあるにはあったが、「マドカ個人として扱って欲しいのに」という、うっとうしい気も強かった。

そのうえ、それだけ「お偉いさん」だと母の頭（ず）も高い。わたしはずいぶん肝焼き娘で、親ほど出来もよくなかったので無理もないが、よく叱られた。その叱り方が上から目線どころか、雲の上から見下ろしているような権高（けんだか）さである。わたしは反発し、怒りをそのままぶつけてキツイことばを返し、母を泣かせることがままあった。40歳を過ぎるまでその繰り返しである。

が、亡くなられてみると、勤勉さ、きちょうめんさはともかく、わたしのこの好奇心と馬力はなんと母に似ていることか。母は油絵を描いたり卓球をしてみたり、結核の手術で片肺しか残っていないのに同僚に誘われると山に登ることもあり、御嶽山（おんたけさん）にはわたしもついて行った。萩焼が好きで、窯元（かまもと）に出入りもしていた。名のある作家の売りものにならない焼き物がほうってあるのをよくもらってきて、いいでしょうこれ、と飾っていると、素人目に焼き物の欠点はわからず、なかなかいい。床の間の軸を季節ごとに取り替え、花を欠かさなかった。美しいものを愛し、人生を楽しんだひとでもあったと思う。

だから、この「ミラノで乳がん切りました」をもし誰かに献じるとしたら、よく喧嘩をしたこの母しかいまい。